

会 議 録

- 1 附属機関等の会議の名称 第1回美里町文化財保護委員会
- 2 開催日時 平成27年11月27日（金）10時00分から11時30分まで
- 3 開催場所 美里町近代文学館2階視聴覚会議室
- 4 会議に出席した者
 - （1）委員 佐藤憲一、栗野敬一、扇明美、佐藤礼志、曾根昭夫、只野龍馬
 - （2）事務局 末永補佐、倉橋主査、岩淵技師
 - （3）その他 なし
- 5 議題及び会議の公開・非公開の別 公開
- 6 非公開の理由
- 7 傍聴人の人数 0
- 8 会議資料 別添のとおり
- 9 会議の概要

必要に応じて次の事項を記載する。

 - ・意見等の概要
 - ・発言者氏名及び発言内容の詳細な記録
 - ・今後の対応詳細は以下のとおり

(1) 開 会 (午前 1 0 時 0 0 分) 司会 末永課長補佐

(2) あいさつ

佐藤委員長あいさつ

お忙しいところお集まりいただき感謝申し上げます。文化財の指定について諮問があったので今日は検討したい。後藤家の槍についてである。事務局から説明いただくが、慎重に審議するとともに、様々なご意見を頂戴したい。

末永課長補佐

教育長、教育総務課長に代わり、挨拶申し上げます。まず始めに第 1 回の開催時期が遅くなったこととお詫び申し上げます。年度末に向けて後 2 回ほど開催したいと考えている。よろしくお願ひしたい。今日は後藤家の槍について諮問がなされたので、それについて協議をお願ひしたい。

(3) 協 議

委員長 それでは進めていく。

関連することだと考えられるので、事務局には 3 番の報告と 4 番の協議事項について一括で説明をお願いします。

事務局説明願う。

事務局 資料に基づき説明。

委員長 教育委員会から諮問があった。それについて文化財保護委員会で検討するということになるわけだが、今事務局から後藤家の槍について詳しい説明をいただいた。また事前配布のあった槍について既にお読みいただいているかと思うので、説明を受けたことについてのご意見があればどんなことでも結構なので意見を出して頂きたい。

栗 野 この槍には「鞘」はないのか。

事務局 町にも、モノとしても情報としても鞘については残されておらず、鞘については分からない。

栗 野 もともと鞘はセットだと思うが。

委員長 もともと鞘はあったはずです。ただ町に鞘についての情報が残されていないとなると、寄贈された時点で鞘はなかったのだと思われます。むしろこれを指定して保存するという事になれば、新たに鞘を作るということも考えていく必要はあると思います。それも専門家の意見を

聞きながら。しまっておくにせよ、展示するにせよ、外気や光に晒しておくというのは決してよいことではないので。ましてやはり展示しない時には鞘に納めるのが常識。専門家から意見を聞いてもそのように言われるはず。

- 曾 根 寄贈されてくださった方は今もご健在か。
- 事務局 恥ずかしながら担当者はお会いしたことが無い。菩提寺である皎善寺さんにはたびたび足を運んでおられると聞いている。
- 委員長 後藤康年さんは「やすとし」さんだが、私の母もそうだが「こうねんさん、こうねんさん」と不動堂の方は仰っていたようだ。この方はお亡くなりになった。皎善寺にお墓もある。奥方の愛さんも亡くなった。お子さんの長男の方は親御さんよりも前に亡くなっていたはず。仙台に御子孫の方はいらっしゃる。康年さんの奥さんの愛さんには、博物館勤務時代に色々とお世話になり、お話を伺ったことがある。今の御当主の方が、康年さん、愛さんらのどのようなお子さんなのかは事務局で確認してほしい。
- 栗 野 後藤家は寄贈当時の昭和49年までは小牛田にいたのか。
- 委員長 私はその辺はよく分からない。仙台に移る時に寄贈したのかもかもしれない。
- 事務局 昭和49年の公民館報の記事の中で「仙台市宮城野区の後藤さん」という記載なので、その時点では仙台に移られていたと考える。
- 曾 根 それでは聞くにしても、聞ける方がいなくなってしまったと考えるしかないのか。
- 委員長 直接的に聞くとすれば、現在の御当主になろう。この方には直接お会いできると思う。お嫁さんとはお会いしたことがあるが、ご主人とは直接お会いしたことはない。愛さんほど詳しくないと思うが、直接会って言い伝えとかのお話を聞くことは可能だと思う。
- 佐 藤 由緒ある系列のお家だろうから、色々伝えられているものがあると思う。その家の話をよく聞いていくべきで、それが大切なことだと思う。
- 栗 野 皎善寺さんが一番詳しいのではないか。
- 事務局 そのとおりと考える。
- 委員長 私もまだ調べてみたことは無いが、後藤家に古文書が残っている。「後藤家文書」といい、段ボール箱に2箱くらいのもので、仙台市博物館に寄託されている。これは不思議なことに小牛田町史では一切使っていない。どういった訳かはわからない。何かあったのだと思う。康年さんという方は旧不動堂村長まで務めた方なので、本来であれば小牛田町史編纂時に地域資料としては後藤さんと連絡を取ろうとしたと

考えられるが、なぜか後藤家文書は町史では使った形跡がない。簡単な目録は仙台市博物館で作っているが、もしかしたらその中になんらかの記述があるかもしれない。ただおそらく、ここに書いてある小牛田町史を含めた記述というのは、基本的に後藤家の歴史を書いている仙台市博物館で持っている資料の中から書いているので、これと大きく違うものが新たに出てくることはないと思う。

扇 長槍については、皎善寺の住職に聞いたことはあったが、どこにあるのかも今まで知らなかった。どこかにあると思うからよく調べて来てくれというようなニュアンスで話を聞いた。他には講評の中に、幕末頃手直ししたと書かれているが、これは何か記録などが残っていたのか。

事務局 おそらく講評時に良く調べているはず。その講評者が見た時にこの評価をしているはずで、文献史料があってそれに基づいての記載ではないと考えている。

委員長 おそらくそうでしょう。これを書くに当たって、槍の穂先を抜いて中心を調べているはず。これは刀剣の調査としては非常に基本的なことです。その調査の結果、幕末に修理したとの結論に至ったのだと思う。これは講評者が見て判定したものと思う。

事務局 残念ながらこの講評者の情報が、町には一切残されていない。

委員長 いつ、だれが、講評したのかが重要なので、今後の再評価ではきちんと専門家にみてもらう必要がある。いずれ、この内容であれば、きちんとわかっていらっしゃる方が書いていると思われるので、参考にはなるが、やはり県から推薦いただいた専門家にも見てもらうことは重要である。

栗野 もと公民館にいた富村寿さんに話を聞いたが、穂先に刃こぼれがあったと伺ったが、今見たところそのような箇所は見受けられない。

委員長 素人目には気が付かないようなところかもしれない。いずれ専門家に診てもらい、報告書を書いてもらう必要がある。伝来については、これ以上詳しい由緒が記されたものは後藤家にも残されていないと思う。織田信長云々について事実であるかどうかは別だが、後藤家にこのように伝わってきたというのは事実であると思う。

事務局 確かに信長に関する伝来の真偽については明らかではないが、「後藤家に伝わってきた内容」そのものが重要であると考えているので、今皆様からいただいたように、後藤家の現当主にもコンタクトを取りつつ指定にむけた確認作業を進めていきたいと考える。

委員長 信長はともかく、後藤家に伝わってきたという歴史だけでも歴史的に非常に重要で文化財に指定する価値は十分にある。それとは別に槍そ

のものの価値、美術的、刀剣的な価値については、専門家にみてもらう必要がある。これまでの評価には刃の長さはあるが、柄の長さがない。これは一体のもので非常に重要なので、専門家に見てもらい、どこからどこまでが柄なのかというのも教えてもらいながら、長さ、太さなども押さえておく必要がある。それから柄の尻の石突などをはじめとする各部位の名前も教えてもらうとよい。そもそも朱柄、「しゅへい」「しゅえ」などという柄の部分も極めて重要な槍なので。

佐藤 藤 これは大名行列の時に運んであるいたものではないのか。毛槍の鞘などをつけて目立つようにしていたのが大名行列であるので。実戦に使ったものではないのではないか。

委員長 いや、それはなんとも言えない部分ですね。槍は戦国時代にはできるだけ長い槍を持った方が有利だという時期もあったので、これくらいの長さのものはあります。これが実践向きか行列用の飾りかというのも専門家に見て貰えばすぐわかる。私はただの飾りというだけではないと思う。やっぱりいざとなれば実戦というように用いられた槍だと思う。

事務局 調べてみたところ、槍の穂先は時代が下るにつれて穂先が長くなる傾向があったようだ。古い時代には、柄が折れても簡単に差し込んで使えるように袋状の取り付け部分を用いた袋槍であったようだ。特に短い方の槍は、今回持ってきた際に感じたが、太く今振り回しても折れそうにない柄が使われているので、使う気になれば使いそうな感じである。長槍は逆に意外としなる。不安になるようなしなりなので、どうかはわからないが、袋槍の方は後藤家の武芸者としての評価や、信長公から拝領したという云われなども考慮すると、実戦で使ったものと捉えた方が見ていても楽しいかと思う。

委員長 槍は意外と重い。長槍がしなるというが、おそらくしなりがないとダメなのだと思う。専門家に聞けば分かるが、私は飾り物ではないと思う。三尺の髭の大男が持つというのは、飾りの為だけではないので、実際に使うものを持っていたはず。そもそも任務としての槍持ちの身体の鍛え方は全然違うので、今の人を持ってとても振り回せないからと言って飾り物だと考えるような問題ではない。ともかく柄については一体のものとして、きちんと記録しておいてほしい。前のケヤキの時もそうであったが、専門家の方に話を聞く時に我々も一緒に聞けるようにしてほしい。穂先に対して、柄の方も信長まで遡るかどうかは疑問だと思う。柄を取り換えることは十分にあり得るから。

事務局 専門家については、県教育委員会からは現在刀剣審査会の委員をされている美術刀剣保存協会の宮城県支部長さんと副支部長さんを紹介

いただいている。次回の委員会の際に、皆さんとともにご教授いただきたいと考えている。第3回委員会の際には答申内容について意見をいただけるよう調整したいと考えている。

栗野 参考までに、この管内で槍を保存されているものがどれくらいいらっしゃるのか知りたい。

佐藤 あると思う。欄間などに掲げている元の武家は結構あると思う。南郷あたりでも数件はあると思う。ここまで長いのはわからないが。

栗野 うちにも柄だけある。ここまでの長さはまさに実戦用かも。

委員長 ぱっと見た感じでは、我々のような素人がわかる錆は無いようだけれども、専門家が見れば錆びる一步手前だとかそういうこともわかりますから、これからの手入れも含めて指導を受けたほうがよいと思う。鞘のことも含めて。

事務局 登米市の歴史博物館でもそうだったが、刀剣の学習会では刀剣教会から講師を招いているようだった。我々も倣っていくのが間違いないのではないかと思っている。

委員長 それでよいと思う。

只野 配布された資料の中に鑑定書が2枚あるが、この鑑定はどなたがされたのか分かるか。

事務局 繰り返しになるが、評価者がだれかはわからない。

只野 後藤家には、織田信長から頂いたという書付などの記録されたものはないのだろうか。

事務局 先ほど委員長から話のあったとおり、後藤家文書の中にどのような記載があるか探していく必要があると思う。

只野 実戦か飾り物かという話もあったが、鑑定の受け止め方は別としても、文化財指定に持っていければとは思っている。後藤さん、康年さんについてはよく話したことがあった。以前お住まいだった場所も記憶にある。康年さんは後藤家の末裔としての誇りをお持ちであったが、これは後藤家の隣の隣が私の実家であったからである。息子さんとも遊んだことがあったが、仙台一中に通っていたはず。仙台の家はあまり大きくはなく、時々こちらにいらしていたかと思う。今はどうなっているのか。

事務局 勉強不足で申し訳ないが、元の後藤家がどこだったか把握していない。逆に改めて教えていただければ幸いである。

只野 後藤家が仙台に移ったのは、昭和10年ごろだったと思う。代々の後藤家の文書類はあったと思うが、こちらに置いていったのか、仙台に持っていったのかは不明だが、今の当主もご存じだろうか。

委員長 今、只野先生がおっしゃった場所からは移られている。信長からもら

ったというはっきりした資料はないと思う。もしあれば後藤家から仙台藩に提出した資料に含まれていたはずだ。世親家譜とかにも含まれていておかしくないが見当たらない。でも信長と後藤家のつながりを表す資料はあったみたいだ。信長から後藤家の先祖がもらった手紙などだが、これらは江戸時代に全部焼けてしまった。後藤信康が政宗からもらった30数通の直筆の手紙があり、内容もわかっているが、幕末に焼けてしまっている。仙台の後藤家の屋敷に置いていて、屋敷が焼けてしまって今1点も残っていない。ただ、仙台藩で元禄年間に編纂した伊達自家記録の頃には残っていたから、仙台藩が後藤家から借りて全部写し取って記録に反映させている。信長から先祖がもらった手紙もあったということだが、江戸時代の火災で焼けてしまったのは残念でならない。何かに写し取っている可能性はあるかもしれないが、後藤家にあるかはわからないし、直接槍につながる記述はなかったんじゃないか。

- 事務局 後藤家文書については、仙台市博物館では目録以外に中身を把握するような作業が行われたかをご存知でしょうか。
- 委員長 もともと仙台市史の編纂時に、編纂室のほうで学生のアルバイトに頼んでやってもらったと思う。目録は頼めば見せてもらえるし、後藤家の許可を得れば実物も見せてくれるはず。寄託であって博物館のものではないから、所有者の許可が必要となる。
- 栗野 槍の字、木偏と金偏の違いについては。
- 委員長 それも専門家に聞いたほうがよいと思う。両方使っている可能性がある。区別して使うべきものなのかどうかという点も含めて、聞いたほうがよい。
- 事務局 大漢和辞典も引いてみたものの、さして違いがあるようには記載されていない。小牛田町史では金偏、ほかのものでは基本的には木偏を使っているものが多い。その辺の表現をどうするかも課題になる。
- 委員長 そのへんも含めて聞いてみるように。関連資料についてだが、仙台風俗志を書いたのは鈴木雨香さんという方で、旧仙台藩士の方である。実際に自分が見聞きしたことを絵入りで書いている。この名物槍、片倉家の糊刷毛槍と茂庭家の胴白槍と後藤家の朱柄槍も絵入りで書いている。おそらく自分で見ているのだと思う。
- 栗野 その方は、いまは。
- 委員長 とっくにお亡くなりになっている。
- 事務局 岩沼の図書館では、その方については企画展を行っている。今回は準備しなかったが、仙台風俗志の関連個所と鈴木氏に関する資料については後日印刷して配布したい。

- 扇 槍とともに織田家から賜ったという家紋は、関係というか、両者一体として考えてなくてよいのか。信長との関係という言い伝えの槍であれば、家紋についてはどう考えればよいのか。
- 委員長 最終的に指定するにあたって、説明の中にどのように表現されていくべきものは、これから考えていくことになると思う。もちろん後藤家の歴史、朱柄槍の由緒を説明する中には、これは必ず五つ木瓜の紋と槍を関連づけて説明されるようになるのが当然。
- 佐藤事務局 これは極めて重要なことだと思う。繋がっているのだから。今回配布した資料の中には槍についてしか記載しなかったが、もちろん非常に重要なことであるので、これは指定理由の説明の中にはきちんと謳っていく必要があると考えている。有形文化財としての指定を目指しているが、その伝わってきた言い伝えは完全に切り離すことはできない。一体として説明していきながら、頂いたものの一つが槍であると説明することになる。
- 委員長 不動堂村誌ではかなり詳しく書いてある。これは伊達世親家譜というものから取っていると思う。これは江戸時代の後半に仙台藩で家来たちから各系譜を提出させて編集したもの。仙台藩士の家譜、系譜を調べる上では基本資料である。それから不動堂村誌は記述したのだと思う。刀、甲冑、槍などについても世親家譜というものは書いてある。ほかに柄の下の方、朱漆が浮いている部分もある。そういうところも今後どうするのか、穂先の手入れと一緒に、これをもし指定して保存公開していくことになるので、保存とともに公開の仕方も考えていかなければならない。今の状態は、事務局でいうようにけして良いものではないと思うから。ほかにないか。
- 事務局 直接関連することではないが、昨年度の春だったが不動堂在住の高校生から、自分の御先祖様が後藤さまの槍持ちをしていたという相談を受けたことがあった。春休みの暇つぶしに色々調べることにしたという話であった。調べたところ、元々別の方が槍持ちをしており、何らかの事情で代わりに務めることになったのが、その高校生の御先祖ということが不動堂村誌の後ろの方に書いてあったかと記憶している。今回は間に合わなかったが、関連することとして話ができるよう準備していきたい。
- 委員長 それは非常に面白い。そのお方の家に何か残されていれば、なおさらである。当然そういう人がいたはず。三尺髭の槍持ちというお役目があったのだから、代々同じ家が引き継いできたのかもしれないし、時には代わるとか、一人だけが務めていたのかとか。とにかく三尺髭を生やした人というのであるから、そのような役目があったはず。面白

い話なので、ぜひ確認してほしい。

- 扇 事務局 その方はどちらのかたであったか。
- 事務局 地元で学校山と言われている旧不動堂小学校跡の北側、雲谷山長福寺の北側にお住まいの方である。他に気になっていた点としては、伊達の大名行列の名物となっていた「後藤の槍」「後藤の髭」として二つの名物があったが、これは同格というか同じレベルというか、槍もそれを持つ人もどちらも名物であったと一体として捉えるべきものでよいか。
- 委員長 それはもちろんその通りである。一体のものとしての名物である。単なる朱柄槍だけが名物だったのではなく、それを持っている槍持ちの大男が一体として有名だった。
- 扇 委員長 この名物はいつまで引き継がれていたのか。
- 委員長 この鈴木雨香さんの仙台風俗志を見ると、ずっと引き継がれていたことが分かる。幕末までそういう行列があり、その中で後藤家の家臣として三尺髭の大男が朱柄槍を持っていたという記述であるから。胴白槍は大崎市松山のふるさと歴史館の入ってすぐの正面のケースの中にある。あれは鞘だが黒と白の鶏毛でできており、綱元が家康からもらった鞘である。かなり大きいものだが槍とともに飾ってある。柄はとても飾れないので外してあるが、穂先だけある。これはちゃんと茂庭家に伝わったもので由緒のあるものである。片倉家の糊刷毛の槍というのは仙台市博物館に寄贈されている。そんなに目立つものではなく、糊刷毛の形をした鞘で、本来は下に毛が付いていてまさに刷毛の形をしている。この二つは鞘だが、後藤の槍は朱柄が重要であるから、朱漆が剥げていたり、今後剥離が進んでいったりする可能性もあるから、手入れや保存の方法を講じていかねばダメだという事になる。
- 事務局 なおさら答申の部分で盛り込んでいけるよう、各専門家に見てもらいたいと考える。
- 委員長 この機会に展示だけでなく町としても色々活用することができると思う。名物槍は白石と松山にそれぞれあるのだから、まちおこしなど交流にも使えるのではないか。
- 栗野事務局 本物は持ち出せなくとも、面白そうだ。
- 事務局 ぜひよろしくご指導お願いしたい。
- 委員長 それではまず専門家に見てもらい、その上で答申するというところでよろしいか。
- 各委員 異議なし。
- 委員長 それでは事務局にお返しする。
- 事務局 最後に栗野副委員長より閉会の挨拶を頂戴したい。

栗野 大変お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。今後も指定に向けた慎重な審議をお願いしたい。

事務局 では、これをもちまして平成27年度第1回文化財保護委員会を終了する。感謝申し上げます。

(6) 閉 会 (午前11時30分)

上記会議の内容に相違ないことを証するため、ここに署名します。

平成 27 年 12 月 日

委 員 _____ 印

委 員 _____ 印